

作戦戦闘史研究の意義とその向うべき方向について ——陸上自衛官研究者として——

齋藤 達志

要旨

本論文は、筆者が戦史研究に従事する陸上自衛官として、なぜ作戦戦闘史を研究するのか、その意義とこれからどのように、また何に留意して研究していくべきかについて考察したものである。

戦争という現象の基礎となる下部構造には、作戦戦闘がある。我々は、戦争の全体像、すなわち戦争の表層だけでなく、その基礎を理解したうえで、全体を洞察する必要がある。なかでも戦争に直接かわる軍人（陸上自衛官も含め）、特に将校は、戦争という特殊な環境とその中で各種計画の策定、実際の戦闘に従事することから、戦争の基礎部分、特に作戦戦闘史を研究する意義がある。

また、逆に作戦戦闘史を学ぶことは歴史の中に同化し、戦争の核心に迫ることであり、そうすることによって同時代のさらに幅の広い前後関係を理解でき、軍人（陸上自衛官、一般研究者なども含め）としての専門性に知恵と疑似的な体験を与えるものとなるのである。

一方、作戦戦闘史を学術的な研究対象とする上での課題もある。第一に作戦戦闘史を理解するためには軍事的専門性が求められること。第二に、恣意的な教訓の抽出を避けること。第三は戦史そのものが軍の要望に応じて編さんされたものであるという事実を認識することである。こうした点から作戦戦闘史は軍の教育に資するための「術」か、歴史学という「学」なのかという議論がなされてきた。本論文においては、作戦戦闘史は「学」を目指すべきであり、そのためには、軍事の専門知識が必要であること、教訓を安易に導いてはならないこと、戦史は歴史に忠実でなければならないことを指摘した。そして、戦争の全体像を深く理解し、実証的かつ中立的な立場で作戦戦闘史を研究する必要性を論じた。

はじめに

戦史と戦術とは表裏一体の関係にある。幹部陸上自衛官の表芸といわれる戦術に打ち込むことは何よりも大切だが、それだけでは伸び方に限度が来る。自ら求めて戦術能力の向上や部隊経験を積みつつ、適正妥当な戦史の観察を行うという車の両輪のように両者、相まって初めて戦術能力の伸展が可能となる。昔よく先輩から聞かされたフレーズである。筆者も陸上自衛官として戦術を学び、それをもとに戦術教官、幕僚などとして戦術想定を作成し、また、図上演習、実動演習を計画実施し、そして戦史教官となった。戦術と戦史の教官となってこの意味がよく理解できた。特に作戦戦闘史¹を専門としたことから、作戦戦闘の深部に入り込むためには戦術の知識が不可欠であることもよくわかった。

一方、作戦戦闘史は、長南政義氏が、著書『新史料による日露戦争陸戦史』において「戦後の日本の歴史学会や大学等の研究機関において学問的な研究対象とされてこなかったため、自衛隊が独占的に研究・教育を行っているのが現状である」²と指摘するように、筆者も含め、戦史、特に作戦戦闘史を研究しているのは自衛官を中心とした防衛省関係者が多い。しかし作戦戦闘史は自衛官の専有物になってはならない。一般の研究者が行う戦史研究に体験を踏まえた専門性（リアリティー）をもって相互に補強する必要があると考える。本小論は、筆者が戦史研究に従事する陸上自衛官として、なぜ作戦戦闘史を研究するのか、その意義とこれからどのように、また何に留意して研究していくべきか、自らの経験などから考えていることをまとめたものである。

1 作戦戦闘史とは、作戦戦闘を主たる内容とする戦史をいう。作戦戦闘とは、本質的には作戦目的達成のため敵を撃破し、敵の継戦意思を喪失させることを目指すものであり、作戦と戦闘が一体となった具体的な軍事行動を指す。また、作戦・戦闘は、作戦と戦闘という異なる概念を並べたものである。一方、作戦とは、陸戦学会編集理事会『野外令の解説』（陸戦学会、1986年）によると①一般に、防衛目的を達成するための行動をいい、戦闘をも含めて使用する、②諸職種連合部隊が、直接侵略部隊、間接侵略部隊等において、与えられた任務を遂行するための数正面又は1正面における一連の行動をいい、1ないし数次の戦闘を主体として行われる、③情報、通信、人事、兵站等の機能と並ぶ作戦・戦闘の機能をいう、とある。また、作戦は個々の戦闘に地位と役割を与えるものであり、その作戦目的は通常、戦闘の効果的な成果の累積によって達成されることになる。戦闘は、『用語集』（陸上幕僚監部、1987年7月）によると作戦の個々の場面において、戦闘力を行使する行為及びその状態をいうとある。

2 長南政義『新史料による日露戦争陸戦史一覆される「通説」一』（並木書房、2015年）21頁。

1 作戦戦闘史研究の必要性

ロシア大統領ウラジーミル・プーチンは、2025年9月3日、米国大統領ドナルド・トランプのウクライナ戦争に対する仲介について、「トンネルの先に光が見えている」と評価したが、「光が見えなくなれば、武力によって解決しなければならない」とも語ったという³。クラウゼヴィッツは、著書『戦争論』で、「およそ戦争は拡大された決闘に他ならない」⁴と述べているが、このプーチン大統領のいう武力、「特別軍事作戦」は敵戦闘力の撃滅を目的とする作戦戦闘であり、また、「決闘」にあたるといえるだろう。そう考えると作戦戦闘ないし決闘は、クラウゼヴィッツのいう「一切の軍事行動の基礎であり、また軍事的行動の一切の組み合わせの究極の支点」⁵であるといえるであろう。

つまり、戦争という現象の基礎となる下部構造には、作戦戦闘があるのである。その作戦戦闘では、不明・不確実・危険・悲惨の環境下、誰もが錯誤・偶然・不如意と対決せねばならず、戦況惨烈の度が加われば加わるほどこれを乗り切るか否かは一に指揮官の能力いかんにかかわる⁶。また、作戦戦闘の中で戦うものたちに差し迫るのは人を殺すことであり、恐るべき死の脅威と心理的圧迫下にある⁷。このことは、いずれの時代においても、またいかなる兵器技術を駆使しても変わってこなかったものであるから、戦争は本質的に、人が中心であり、人が行っているものといえる。イラク戦争時に第1海兵師団を指揮したジェームス・マティス元米国防長官は、「アレクサンドロス大王なら、我々が現在イラクで対峙している敵を見ても、決して動揺しないだろう」⁸といったのもこのことを意味するのであろう。大東信祐氏が「壮大な安全保障論、各戦略論においても『戦闘』の実相と離れた議論は、基礎のない建物と同じで『砂上の楼閣』の危うさを感じずるものである」⁹と述べるように、我々は、戦争をみる際、戦争という建物のみではなく——もちろんこれは重要ではあるが——、その基礎をしっかりと理解した上で、戦争という全体像をみるのが重要と考えるのである。そ

3 『産経新聞』（2025年9月4日3面）。

4 クラウゼヴィッツ著・篠田英雄訳『戦争論（上）』（岩波書店、2003年）28-29頁。

5 同上、80-81頁。

6 山田積昭「序言」富士学校戦闘戦史編さん室編『戦闘戦史 攻撃（前編）』（九段社、1973年）。

7 ウィリアムソン・マーレー「軍事史と軍事専門職についての考察」ウィリアムソン・マーレー、リチャード・ハート・シンレイチ編、今村伸哉監訳『歴史と戦略の本質（上）歴史の英知に学ぶ軍事文化』（原書房、2011年）170頁。

8 ウィリアムソン・マーレー、リチャード・ハート・シンレイチ「序説」『歴史と戦略の本質（上）』17-18頁。

9 大東信祐「巻頭言」『軍事史学』第52巻第4号（2016年9月）。

ここに作戦戦闘史を研究する意義があると考え。

2 軍人が作戦戦闘史を研究する理由

(1) 軍人の専門性

軍人¹⁰、特に将校（幹部陸上自衛官）の専門性とは何か、軍に求められているのは戦争、特に敵戦闘力を撃滅し、作戦戦闘に勝利することである。つまり、軍を率いる将校は戦争において勝利するための戦いの術（art of warfare）の専門家でなければならないのである。この戦いの術という専門知識は、戦争という特殊環境下において任務を達成するための戦略・作戦・戦術、部隊指揮・統御、情報、通信、人事、兵站などをいう。

そしてこの専門性は、ナポレオンが、「作戦計画を立てることは誰にでもできる、しかし戦争をすることのできるものは少ない。なぜなら出来事と状況とに応じて行動するのは真の軍事的天才でなければできないことだからである。最上の戦術家も将軍としてはともすれば凡庸であったのはそのためである」¹¹と述べるように、戦争という特殊環境下での作戦計画の作成「Planning Operation」と用兵「Conduct of War」¹²を発揮することが求められるのである。このようなことを考えると戦争に深くかわる地位の高い将校ほど、戦争及びその本質を学ぶことが必要となってくる。例えば、暴力がその中心にありそのエスカレーションを抑えることに難しさがある点、政軍間の信頼関係が必要な点、戦争目的に対する国民の支持が必要な点、非常に複雑な状況を直感的に理解できる意志決定者（特に最高司令官）の才能が必要である点、軍隊と国民の士気や両者の障害に打ち勝つ決意が必要な点、重心への戦力の集中が必要な点、どこにでも常に摩擦があるという点¹³、その他、恐怖、危険、疲労、飢餓、悲劇、混乱、戦運、絶望、天候、技術的变化、さらにはそのような中でどのように勝利、もしくは敗北するのかなどである。これらを学ぶには戦史が大きな役割を担う。たとえ将校が

10 本論文においては、自衛官（特に陸上自衛官）も軍人に含める。

11 オクターヴ・オブリ編、大塚幸男訳『ナポレオン言行録』（岩波書店、2000年）251頁。

12 『独逸国防省出版（1936年版）軍隊指揮』の序に「用兵ハ一ノ術ニシテ科学ヲ基礎トスル自由ニシテ且創造的ナル行為ナリ人格ハ用兵上至高ノ要件トス」とあり、用兵は科学を基礎とする術であり、これを極めるためには最終的には人間の観察による人格の修養が必要であるとしており、ここに軍人に求められている術の特性が示されている。（『陸軍大学校譯独逸国防省出版（1936年版）軍隊指揮』（陸軍大学校将校集会所、1936年10月））

13 ベアトリス・ホイザー著、奥山真司・中谷寛士訳『クラウゼヴィッツの「正しい読み方」戦争論入門』（芙蓉書房、2017年）325-326頁。

戦争経験を持っていたとしてもそれはただ戦争全体の一面、断片に過ぎないのである。

(2) 戦場の追体験

将校が一面的な戦争の実際以上に戦争を知ろうとするならば、それは戦史を研究することによって到達し得るのである。つまり、戦史は冷静かつ専門的な言葉で戦争の現実を知らせるのである。そして戦史の研究が歴史的領域の広さと深みへ突き進めば進むほど、これが戦争の現実、本質だということを把握し得るようになる¹⁴。その中でも特に戦争における基礎部分を占める作戦戦闘史を学ぶことは、将校として身を歴史上の戦場に置いて、追体験、つまり戦史の中に現れる指揮官の心境に身を置いて考えることを具現できるといえるだろう。さらに指揮官の心境になりきることは、自らに対し実戦とはどんなものか、この実戦に役立つ己を作り上げるためにはどう心得なければならないか、という問いにこたえることができるほか、平時の部隊訓練や業務遂行の準拠ともなる¹⁵のである。だから軍人は戦史、作戦戦闘史を学ぶと考えるのである。フォッシュ元帥が、「人間は戦場にあつて研究することはできない。戦場ではすでに知っていることを単に適用することができるだけである」¹⁶というように、平時から学んで準備しておくことが必要である。

しかし、戦史は万能ではなく、また、戦闘は変転極まりない動きの連続であるので、客観的な事実といえどもこれを記録することは不可能である。まして指揮官が如何なる心境において決心し、命令したとか、精神上のパニックがどのようなものであったかなどを史料で把握することは非常に難しい¹⁷ということは、十分に認識しておく必要がある。ロイ・アップルマン氏がいうように「真実は戦いにおける最初の犠牲者」¹⁸なのである。特に近い時代に行われた戦争の史料は乏しい。このため我々は比較的史料の充実している大東亜戦争を学んでいるのである。

14 齋藤達志「戦史研究のあるべき姿について——一つの見方として——」『陸戦研究』第445号(2018年2月)18頁。

15 第3教官室「談話室(5)(戦史についての思い出)」『幹部学校記事』第6巻第8号(1958年8月)66頁。

16 John E. Jessup, Jr. and Robert W. Coakley, "Preface," *A Guide to Study and Use of Military History* (Washington, D.C.: Center of Military History United States Army, 2004), p. xi.

17 近藤新治「戦史と史学について——戦史編纂官の立場から——」『軍事史学』第8巻第2号(1972年9月)11頁。

18 Roy E. Appleman, *United States Army in the Korean War* (Washington, D.C.: Office of Military History Department of the Army, 1961), p. xiv.

3 作戦戦闘史研究に必要な専門知識

(1) 戦術の理解

軍の将校、幹部の陸上自衛官として身を歴史の中の戦場に置いて、その指揮官の心境まで自らを落とし込むためにはどのような知識が必要なのであろうか。それは多々あるかと思うが、最も必要と思われるのは冒頭でも戦術と戦史は車の両輪と述べたが、その究極は戦術を体得することであろう。

戦術とは、クラウゼヴィッツの著書『戦争論』には、「戦闘において戦闘力を使用する仕方」¹⁹とある。この戦術は、いわば自由意志をもつ眼前の敵と我との時間的空間的な戦闘力の行使に関する学術ともいうことができる。つまり、いかなる目的（戦闘の目的）のため、何時（戦闘の時期・期間）、何処（戦場）で、いかにして（戦術行動）、戦闘を行うかの選択²⁰であるといえよう。これを行うためには、戦闘目的達成の手段たる戦術行動（一般的には攻撃・追撃・防御・遅滞行動・部隊移動など）の概念（原理・原則など）とその性格、特性及び効用等について熟知すること、現実の状況下で行動を実行に移す行動方針を決定し実行する、いわゆる状況判断（思考過程）を理解することが必要である。

まず、攻撃・追撃・防御・遅滞行動・部隊移動などの戦術行動については、陸上自衛官は、陸上自衛隊の教範である『野外令』、各職種教範などですでに勉強し、さらには戦術想定、現地戦術、図上演習、実動訓練などで知識のみではなく実際の行動として体得している。しかし、陸上自衛官以外の一般の研究者はこれらに触れる機会はほぼない。ただ最近、陸上自衛官 OB もしくは軍事史研究者などが執筆している『戦術』を解説する書籍²¹ などもあるので多少は触れることができる。

さらに理解するためにはこの戦術行動から、作戦戦闘史の中の敵我の戦闘をそれぞれ攻撃の場合は迂回、包囲、突破など、防御の場合は陣地防御、機動防御など、その特性とともに知ることが必要である。例えば国土防衛戦の戦例である沖縄戦の場合を例にとると、首里に司令部を置き南部沖縄を全周防御する第32軍に対し、米軍は北方から3個師団並列で攻撃し両翼包囲を狙っている。第32軍は、正面の第62師団の1個師団のみでは抗し難く防御が崩壊すると見積り、新たな防御の重点を形成するため南部から第24師団と独立混成第44旅団を北上させ、第62師団と並列して北正

19 クラウゼヴィッツ『戦争論（上）』143頁。

20 陸戦学会編集理事会編『戦術との出逢い（戦術の初学）上巻』（陸戦学会、1988年）1頁。

21 近刊の例を挙げれば、木元寛明『戦術の本質』（SBクリエイティブ、2022年）がある。

面の防御正面を2個師団に増強した、などの日米地上軍相互の戦術行動の態勢を理解しなくてはならない。

(2) 作戦戦闘様相とそのシミュレート

状況判断（思考過程）は、任務を基礎とし、何を、いつ、決定すべきかを至当に判断することであり、これを指揮作用の面から認識したものが決心である。指揮官の指揮行為のうちで最も重要なことは、与えられた任務を達成するために適時適切な決心に基づき所要の命令を発することである²²。このため指揮官は、継続的に幕僚に指針を示して見積りを行わせ、その成果を活用する。この指揮官の状況判断の過程を把握し、実証することは作戦戦闘史にとって最も重要といえるだろう。

状況判断の一般的要領は、最初に上級部隊の構想の中において自らの部隊が占める地位と役割を明らかにするなど任務を分析し、具体的に達成すべき目標とその目的を明らかにする。その結果、今後何を決めなければいけないか（見積りの焦点）が明らかになる。この見積りの焦点は戦術行動、戦況などにより様々であるが、陣地攻撃、陣地防御の場合における最初の見積りの焦点は、攻撃時期、目標、方向、防御を行う地域、陣地線、最終確保地域などが一般的である。その後、この見積りの焦点に基づき、地域の特性、敵情及び我が状況、相対戦闘力及び敵の可能行動を把握して考察を加え、実行可能な我が行動方針を列挙し、これを分析・比較して結論を案出するのである。ここでは特に作戦戦闘史を理解する上で重要と思われる地域の特性と、実行可能な我が行動方針について一例を示したい。

地域の特性を把握することは、特定の地域が彼我の戦術行動に及ぼす影響を見積る上で重要である。特に重要なのは緊要地形、接近経路の把握である。緊要地形は、「それを支配または占領することにより彼我の戦術行動に決定的な影響を与える地形」²³であり、一般的価値、敵が保持した場合、我が保持した場合を分析するといずれも重要な地形である。具体的には、視射界良好な高い丘、稜線・水系、道路・鉄道・通信等の中核、敵の上陸又は降着適地、港湾、橋、渡渉場などであるが、任務、部隊の大小、戦況進展の度合いに影響される。沖縄戦でいえば、代表的な嘉数高地、前田高地は全周に対し視射界良好で、第32軍が保持すれば米軍の攻撃を直接阻止することができ、米軍が保持すればじ後の攻撃の足掛かりとなる緊要地形である。また、運玉森、

22 陸戦学会編集理事会『野外令の解説』83-84頁。

23 陸戦学会編集理事会編『戦術との出会い（戦術の初学）中巻』（陸戦学会、1982年）710頁。

天久台などは第32軍司令部のある首里両翼を支える堅固な地形（門柱）であり、第32軍がこれを保持すれば米軍の攻撃を直接阻止でき、米軍がこれを保持すれば首里南方に進出して第32軍を包囲できる緊要地形である。さらにこの前提として、彼私の部隊編成とその規模、保有する兵器の性能・特性、特に火器の射程、機動力の有無などを把握することも必要である。

接近経路は「緊要地形または目標に至る経路」²⁴であり、戦車などの機動力が優れている場合は機動が容易な平地の接近経路を、砲兵火力が優れている場合は火力発揮が容易なように、逐次に観測点を確保しつつ前進する高地（稜線）の接近経路などがある。これら緊要地形と接近経路を戦場となる地形図もしくは現地の地形をもとに把握することが必要である。特に接近経路上において敵の機動が集約するような地域は、周囲の緊要地形から火力を集中して敵部隊を一挙に撃破できる場所として、敵我共に重要である。このように緊要地形・接近経路の考えを理解、体得できれば、現地ではもちろん、地形図を見ただけで戦場の地形が浮き出てくるようになる。それに史料に基づく敵私の部隊を乗せると戦闘の様相がみえてくるのである。また部隊を乗せるためには戦況図と部隊符号などを理解する必要がある。

一方、行動方針の実行の可能性についても注意することが必要である。例えばインパール作戦を例にとると、当時第15軍のインパール正面に使用し得た輸送兵力は、自動車輜重23個中隊、駄馬輜重12個中隊であり、各中隊はいずれも約40屯を携行し、車両は1日50km、駄馬は1日24kmを推進するとすれば、合計57,520屯kmの補給推進量であった。これに対し、実際の需用量は、1個師団1日あたり、弾薬90屯、糧秣40屯、その他10屯とすると概ね140屯であり、軍3個師団、軍直轄部隊を1個師団、兵站基地マンダレー～補給端末コヒマまでを1000kmと見積もると、1日の需用推進量は560,000屯kmとなる。よって57,520屯km / 560,000屯kmから1日の供給推進量は、1日の需要推進量の1/10に過ぎない²⁵。さらにこのインパール作戦を兵士一個人から見ると、携行する食糧は21日分（3週間）のみであり、じ後は敵の食糧によらなければならない作戦であった。このような実員指揮尺度もしくは部隊の重さという観点から、作戦自体の実行の可能性などを検証する必要がある。

これまで述べた事項は戦術として最小限のものであるが、地形図若しくは現地で緊要地形・接近経路を把握し、これに戦況に応じた敵私の部隊及び兵器を乗せて史料に

24 陸戦学会編集理事会編『戦術との出逢い 中巻』715頁。

25 小口徳二「インパール作戦の梗概とその兵站的観察」『幹部学校記事』第42巻（1957年1月）。

基づき作戦戦闘の様相をイメージし、さらに敵我の指揮官の状況判断を加えれば、歴史の中の戦場において、そこに位置する指揮官の心境などを追体験的にシミュレートできるのである。

4 作戦戦闘史を研究した効用

作戦戦闘史を学んだ効果というのは具体的にどのように表れるのだろうか。退役米海兵隊中将ポール・K・ヴァン・ライパーは、「歴史研究を通じて得られる自分が経験するような感覚は、戦争の実行者に対し作戦行動には類似点があることを示し、さらに戦術的及び作戦上の問題について迅速有用な解決策を習得する作用がある…実体験及び歴史から学ぶ自己経験の感覚とが合わさって、戦争に固有の緊張に屈することなく、幅広い根拠に基づく判断を下せる能力を得ることが可能となった」²⁶という。これはクラウゼヴィッツの『戦争論』に典拠されているものでもあり、「指揮官は、…いかなる場所いかなる瞬間にも必要な決断を自分自身の知性の力によって下すことができなければならない。それだからこの知識は、指揮官自身の精神および生活と完全に同化することによって、真の行動能力に転化されねばならない」²⁷とあるのである。また、ウィリアムソン・マーレー氏は、「少なくとも歴史は、専門職の軍人に扱いにくい問題について如何に思考するか、不確実性に如何に取り組むか、その職歴を通じて彼らが必然的に追わなければならない責任の取り方に対していかに準備するかを示唆するものなのである」²⁸と述べている。

これらのことは軍人に限らず、精神的に圧迫された環境下で瞬時の決断を求められる多くの社会人にも、何らかの物事を考える際の示唆となるであろう²⁹。いずれにしても、軍人、特に将校が作戦戦闘史、さらには軍事史を研究するということは、1970年、軍事史が将校教育に対し如何なる効果があるのかを審議した、米国陸軍参謀総長ウィリアム・C・ウェストモーランド大将設置の特別委員会が結論とした、「幅の広いものの見方、俊敏な判断力、洞察力の向上、そして職業軍人の専門性に寄与す

26 ポール・K・ヴァン・ライパー「歴史と軍事専門職との関連性—あるアメリカ人の見解—」『歴史と戦略の本質(上)』80頁。

27 クラウゼヴィッツ『戦争論(上)』184、185頁。

28 マーレー「軍事史と軍事専門職についての考察」175頁。

29 樋口隆晴『戦闘戦史—最前線の戦術と指揮官の決断—』(作品社、2018年)6頁。

る」³⁰ものであることは間違いないであろう。要するに、作戦戦闘史を学ぶことは、軍人に対して戦争という特殊な環境下にその専門性を発揮するための、知恵と疑似的な体験をもたらすのである。

また、一般の研究者が先に述べた戦術を理解、会得することにより、現地で、また地図上で戦術を語り、追体験を行うこととなり、さらに陸上自衛官の戦史研究者と議論することは、相互に戦史に対する理解を深めることであろう。例えば、沖縄戦における重要な緊要地形の一つで現存する沖縄県西原町の運玉森（標高158.1m）の頂上で、北に棚原、西に首里、南に津嘉山を遠くに見下ろして、各地形の価値、これらをめぐる作戦戦闘様相をイメージアップ（疑似体験）したとする。もし自分が第32軍司令官だったらどうするか、どうするべきだったのかなどということを考え、相互に議論するのも沖縄戦という作戦戦闘史研究をさらなる深みへと導くであろう。

5 作戦戦闘史研究上の問題点

(1) 戦前の戦史教育と戦史編さん

1810年に設立されたプロイセン陸軍大学の専門規定で、「戦史」は「一般の歴史」から明確に区別され、戦略や戦術の授業と関連付けて教えられていた。そしてその目的は戦争経験がない将校に、いかなる時代にも通じる軍隊指揮の原則を教えることにあった³¹という。つまり、過去の戦争の勝敗を分析することによって、そこから教訓を抽出することを目的としていたのだ。なかでも作戦戦闘史、とりわけ最新のそれは、「プロフェッショナルな判断や決心のための実践的な必要性を目的とした教育にとって、まさに無尽蔵の碎石場としての役割を果たした」³²という。これについては、プロイセン陸軍の参謀本部戦史部員であったシュヴェルトフェーガーが、「戦史が歴史によって装飾された戦術のお遊び」に墜落してしまうと注意を促していた³³。また、マイケル・ハワード氏も、「過去を学ぶ場合、『教条的解決法』の探求をその目的に添えることはあり得ないし、かつ断じて許されない。このことこそ歴史研究者が学生に最初に教え込むべき『教訓』である。この点に鑑みると、歴史研究に関わる他の分野

30 James L. Collins, Jr., "Foreword," *A Guide to Study and Use of Military History*, p. ix.

31 ベルト・ヴェーグナー「作戦史の目的とは何か」トーマス・キューネ、ベンヤミン・ツィーマン編著、中島浩貴訳『軍事史とは何か』（原書房、2017年）139頁。

32 同上。

33 同上、140頁。

の専門家が軍事史に異議を唱えたり、いかがわしさを感じるのは当然の結末といえよう」³⁴と述べる。

一方、明治以降の日本陸軍の戦史教育はどうだったのだろうか。陸軍大学校の戦史教育の目的の当初に、「戦史は戦術を發達せしむるため最良の材料なり戦術を研究するものは最も之に重きを置くを要す」³⁵とあり、プロイセン陸軍大学同様、戦史を戦術の理解に資するためと位置付けている。また、この教材になったと思われる参謀本部編纂の『明治卅七八年日露戦史』は、その「日露戦史編纂綱領・規定・注意等」³⁶に、「日露戦史史稿審査ニ関シ注意スヘキ事項」として、「一 動員または新編成完結の日は明記するを避くべし」、「二 各部団隊間 意志の衝突に類することは終にその実行せる事蹟に関するものを主として記述するを要す」、「三 軍隊または個人の怯懦、失策に類するものはこれを明記すべからず…」、…「六 我が軍戦闘力の耗盡もしくは弾薬の欠乏等の如きは決して明白ならしむべからず」、…「十二 高等司令部幕僚の執務に関する真相は記述すべからず…」などと、軍にとって不都合なことは除くよう記されている。角田順氏が、「日本軍の先天的な優秀さを立証しようとして編さんされたように見え、幾つかの基本的欠陥（例えば大本営体制の不備、陸海軍の対立、高級人事の不適、兵站の不備など）に対する今後の反省と抜本的対策は記載されることはなかった」³⁷と述べるように特定の傾向があったと思われる。

また、日米開戦以降、参謀本部本邦戦史編纂部が着手していた『大東亜戦史』の「大東亜戦史編纂綱領」（1943年4月）の編さん方針には、「大東亜戦史は教訓を主体とする重点主義の色彩を鮮明ならしむるものとし、概ね方面毎に編さんするものとする」³⁸としているのである。

戦後刊行された『戦史叢書』全102巻も、「なるべく客観的な記録となるように努力し、史料に基づいた実証的な歴史として描くように意を用いている」³⁹と評価され

34 マイケル・ハワード「軍事史と戦争史」『歴史と戦略の本質（上）』32頁。

35 高野邦夫『近代日本軍隊教育史料集成』（柏書房、2004年）212頁、齋藤達志「陸軍大学校の教育目標とその変遷—陸軍大学校は何を狙いに教育して来たか—」『陸戦研究』第661号（2008年10月）。

36 「日露戦史編纂綱領・規定・注意等 明治39年2月」（防衛研究所戦史研究センター所蔵）、齋藤達志・尾上盛太郎「戦史編纂に関する一考察—防衛研究所戦史室『戦史叢書』編さんのための史料収集を中心に—」『安全保障戦略研究』第4巻第1号（2023年12月）174頁。

37 角田順「大東亜戦争 陸海軍戦史の公刊に寄せる」『大東亜戦争戦史叢書』第1冊付録No.1（朝雲新聞社、1966年8月）。

38 参謀本部「大東亜戦史編纂綱領」（防衛研究所戦史研究センター所蔵）、齋藤・尾上「戦史編纂に関する一考察」176頁。

39 藤原彰「防衛庁防衛研究所戦史室『戦史叢書』」『歴史学研究』第451号（1977年12月）。

る一方、①執筆者のほとんどは旧軍人で研究者ではない、②陸海軍、各方面別に別個に構成されており一貫性がない、③作戦・戦闘に重点が置かれ、その結果、それ以外の兵站、軍政、人事、衛生、教育などについての言及がほとんどなく「参謀史観」と批判される⁴⁰、などが指摘されている。

(2) 「術」か「学」か

このように戦前のドイツおよび日本で行われていた戦史教育及び戦史編さんは、そこから何か教訓を見出す教訓戦史の傾向がある。クラウゼヴィッツは『戦争論』の第2編第5章「批判」の中で「勝手な仮定や想定を設けて、途中で追及の手を緩めるようなことがあってはならない」⁴¹と仮定を設けることによって、真実の追求を緩めることを諫めているが、より批判的に取り扱うべきだといっている。いうならば、物事を根底から疑い見直す態度である。一方で教訓戦史は肯定的にとらえて否定せず、改善のみを論ずなど学びの態度が異なるのである。こういうことから、「やはり軍事とか戦史というものがまだまだ、アカデミックな世界で十分な市民権を得られていない」⁴²といわれる所以と考えられる。

まとめてみると作戦戦闘史研究上の問題点は、大きくとらえて次の三点と考えられる。第一に、作戦戦闘史を理解するためには軍事的専門性が求められる。二番目は、一般の歴史学では消極的に取り扱う「教訓」という問題である。つまり、一般の歴史家が「史料がないからわからない」として空白部を残すのに対して、軍の歴史家はその空白部分に対して何らかの解答を準備しがちであるということがある。そして第三は戦史そのものである。やはり『明治廿七八年日露戦史』のような公刊戦史も、歴史家が編さんするのではなく、軍人が軍の要望に応じるフィルターを通して編さんされたものであるという点である。

この三つを総合すると作戦戦闘史は実学という「術」か、歴史学のような「学」が主体なのかという議論に収束されるであろう。旧軍における戦史の研究（教育）は、戦史を「実践の学」として位置付けることにより、歴史の重みを背負って歩くという心情が遊離し、戦史の基礎理論に対する考究が影を薄める結果となった⁴³。また、軍

40 庄司潤一郎「〈講演〉戦史研究を振り返って」筑波大学日本史懇話会『日本史学集録』第40号、別冊（2019年7月）5-6頁。

41 クラウゼヴィッツ『戦争論（上）』203頁。

42 庄司「〈講演〉戦史研究を振り返って」12頁。

43 近藤「戦史と史学について」3頁。

の歴史家が参謀本部など軍隊内の命令指揮系統に組み込まれ、さらには軍指導部が研究の内容にも影響を及ぼしていたのである。これらを考えれば当然ながら歴史家から見ると戦史は学術的に見てより批判を加えるべきものであったといえるだろう。

6 作戦戦闘史の向うべき方向

(1) 三つの問題点とその対応

作戦戦闘史は「術」を目指すのか、「学」を目指すのか、と問われた場合、史料的に検証可能な「学」、歴史学としてさらに幅広く発展させることがこれからの向うべき方向であろう。ここでもう一度三つの問題を振り返ると、第一の軍事的専門知識という点については、すでに多くの歴史家（研究者）が学んでいるのを承知しているが、机上で学べるものはある程度学んでもらう必要があるだろう。例えば防衛研究所戦史研究センターで作戦戦闘史に興味をもつ一般の研究者に戦術原則などについて講義する機会を設けることも必要であろう。また、軍事史学会に多くの自衛官が入会し活動して相互に刺激を与えることも、自衛官を含む作戦戦闘史の勉強会などで相互に議論することも効果があるだろう。しかし、野外でなければ学べない各種部隊行動などについて理解するためには一般の研究者が体験することは難しいので、学会、勉強会などで努めて体感できるような場を設け、自衛官と一般研究者が相互に対話する機会を設けることも必要であろう。一方、自衛官研究者も平易に軍事的専門性を説明できるようにする工夫が必要である。

第二の「教訓」という問題については、マイケル・ハワード氏が、「戦争の現実とは、人間がこれまでに直視を求められてきた極度に不快な人生の現実の一つです。そうした複雑で不愉快な現実の本性を発見し記録することこそ、まさしく『本来の歴史家』の役目です」⁴⁴と指摘するように、真実の域を超える教訓という実学の目的に応じる整然とした説明を創るのではなく、実証性が不自然となるようないかなる結論付けもしないということであろう。歴史学においても、これを人間が行う以上、史料やデータの選別、配列にも主観や選別が入ることは歴史家も十分承知はしている。しかし、混沌とした実相をあまりにもきちんと整理しすぎるとそこに恣意が介在しているのではないかと疑われてしまうことを理解しなければならない。ここで注意すべきは、

44 マイケル・ハワード「軍事史の利用と濫用」ウィリアムソン・マーレー、リチャード・ハート・シンレイチ編、今村伸哉監訳『歴史と戦略の本質（下）歴史の英知に学ぶ軍事文化』（原書房、2011年）219頁。

演繹的に教訓を導くのではなく、あくまでも史実に基づく帰納的な結果から案出されたものを教訓としなければならないということである。当然ながら研究材料によっては、教訓など案出されない場合もあるのである。

マイケル・ハワード氏は、軍人がこの問題を回避するために次の三つの原則を示している⁴⁵。第一に、幅広く研究しなければならないこと。第二に、軍事史家は一つの戦役を、単に公刊戦史から紐解くのではなく、回顧録、手紙、日誌、加えて創造力豊かな文学作品をも使うなど奥行きのある研究をしなければならないこと。第三に、戦争は、社会間の闘争であり、戦いを行う社会の性質を理解する場合に限って、戦争を十分に理解したといえることから軍事史家は前後関係をふまえた研究を行わなければならないことである。いずれにしても一つの研究対象を掘り下げる「深さ」と、その対象に類似した多数の事例を研究するという「幅広さ」と、戦争ないし戦闘の政治的・経済的・社会的「文脈」についての十分な理解をもたなければならない⁴⁶のである。

第三の戦史、特に参謀本部が作成した公刊戦史は特定のフィルターを通したものである、という問題については、『戦史叢書』のように史料に語らせるという形式を採るべきであろう。防衛研修所戦史室室長で『戦史叢書』作成を担当した西浦進氏は、「我が国の旧軍でも戦史の研究にはかなりの努力を払ってきた。しかし、今日これを今次戦争の成果と合わせて顧みると、そこに戦史研究上の欠陥を自覚せざるを得ないものがある。その第一は、正確詳細な史実に基づく、客観的な観測の不足である。これは戦勝国の避けがたい宿命であるともいえる。その第二は、作戦戦闘だけに没頭し、絶無とまではいえないにしても、最高統帥や戦争指導に関する戦史史料の不備と、その研究や教育が不振であったことである」⁴⁷と回想するが、重要な指摘と考える。

(2) 作戦戦闘研究の基本的態度

以上の問題点と対策をふまえた上で作戦戦闘史はどのように研究し、その成果を表現すればいいのであろうか。この思考方法として特に参考になるのは『戦争論』の第2編第5章「批判」にある。クラウゼヴィッツは、戦史研究の基本的態度について次の三段階で記述している⁴⁸。

第一段階は、「疑わしい事実を歴史的な観点によって探究し確定する仕事である

45 同上、227頁。

46 戸部良一「『軍人歴史家』と『純粹歴史家』」『軍事史学』第40巻第2・3合併号(2004年12月)6頁。

47 西浦進『兵学入門』(田中書店、1975年)225頁。

48 クラウゼヴィッツ『戦争論(上)』202-203頁。

…」とある。つまり正確な史実の把握である。

第二段階は、「原因から結果を説明することである。これが即ち本来の批判的研究であり…」とある。つまり、史実に関する How と Why を追究しようとする因果関係の理解と把握である。クラウゼヴィッツは、この因果関係を理解し把握するために歴史上の人物の位置に自分自身を置いた上で、つまり、歴史に入り、その時代の政府なり人物なりにどのような取るべき手段があり得たかを検討し、そして同時に、その背後の諸事件の相関関係をより大きな視点から分析したという⁴⁹。そうすることにより同時代の出来事以上にはるかに広範囲にわたる様々な事実を掌握し、政治的、軍事的闘争やその変遷に対する洞察力を養うことができるというのである。

第三段階は、「軍事的行動において使用された手段を検討する仕事である。これが本来の批判であり、かかる批判には賞賛と批難とが含まれている。そしてこの場合に戦史に役立つもの、或いはむしろ戦史から引出される教訓に役立つものが、即ち戦争指導の理論である」とある。原因からどんな結果が生じたか、また使用された手段はその目的に適合したかということの研究する、つまり目的と手段の評価である。この作業は、あたかも戦争目的という最終目標に向ってそれ以下の目的とそれを達成するための手段が正しいのかどうかという布の糸を一つ一つたどっていくように、歴史の中にある複雑な因果関係を、信憑性のある史料をもとに解明していくことである⁵⁰。当然ながら解明できない点も生じてくる。ゆえにクラウゼヴィッツは、「実際には生じなかったにせよ、しかし生じることのあり得たような事態、それだからまた考察から外すことを絶対に許さないような事態について、多くの仮定を設けざるを得ないことも明白である」⁵¹と述べている。この仮定を設けることこそ自衛官がその経験、知識などから論理的かつ妥当に導けるものであろう⁵²。ただしその仮定の扱いは歴史学の疑いの目に耐え得るものかどうか十分に注意する必要がある。そしてクラウゼヴィッツは、この第二段階と第三段階について、一切のものをその究極の要素まで徹底的に追究して、疑いを差し挟む余地のない真実に達することを求めている。

(3) 「学術」を目指して

次に求められるのは以上のような過程から生まれた研究成果を学術論文として学会

49 ピーター・パレット著、白須英子訳『クラウゼヴィッツ—「戦争論」の誕生』（中央公論新社、1991年）372-373頁。

50 齋藤「戦史研究のあるべき姿について」21頁。

51 クラウゼヴィッツ『戦争論（上）』209頁。

52 齋藤「戦史研究のあるべき姿について」21頁。

誌などに投稿し、若しくは書籍として刊行し、多くの人に認知されることが必要であろう。学術論文又は書籍においては、研究した成果を論理的に筋道を立てて展開し、読者がなるほどと納得できる結論に導くのである。そこには一貫した論理性と実証性が求められる。そして蓄積された多くの研究成果（諸論）が相対的・体系的に整理されたもの（体系的纏^{まとま}り）が「学」となりこれを構成するのではないか⁵³。

以上、縷々述べてきたが、ともあれ、忘れてはいけないのは、歴史とは何か、戦史とは何かと常に問い続け、先に述べた三つの問題点を考慮しつつ自らの研究の正当性を維持していくことが必要と考える。ロナルド・H・スペクター氏がいうように「軍事史がますます自律的、学術的な方向を志向し、これがますます『非軍事化』される傾向を示していくことは、職業軍人にとって歴史研究の重要性がなくなったということの意味するものではない。その反対に、歴史の研究が学問的になり自律的になればなるほど、最終的には歴史は戦争研究者にとって役に立つものになる」⁵⁴ということを心に刻む必要がある。

おわりに

作戦戦闘史研究の意義とその向うべき方向ということで述べてきたが、ここからいえるのは、作戦戦闘史を学ぶことは戦争の核心に迫ることであり、さらに歴史の中に同化することである。そうすることによって同時代のさらに幅の広い前後関係を理解でき、陸上自衛官（当然ながら一般研究者も）としての専門性に、知恵と疑似的な体験を与えるものとなるのである。また、作戦戦闘史を研究するためには、軍事に関する専門知識が必要であること、また教訓を安易に導いてはならないこと、戦史は歴史に忠実でなければならないことなどに留意し、戦争の全体像をよく理解した上で、実証的かつ中立的な立場で作戦戦闘史を研究する必要があることを述べてきた。戸部良一氏がいうように、「軍人歴史家は、軍事史の『乱用』を慎み、実務家としての経験を活かしながら、純粋歴史家とはやはり少し違った問題意識や視点から、ユニークな研究を世に問うことが必要であろう。軍事的専門知識やそれに裏付けられたセンスは、

53 高木英明「学問の意義と大学の役割—金子勉の大学研究に学ぶ—」『教育行財政研究』第39号（2012年3月）30頁。

54 Ronald H. Spector, "Military History and the Academic World," *A Guide to Study and Use of Military History*, p. 436.

軍人歴史家の最大の強み」⁵⁵ということを最大限に意識し、活用しなければならない。ウォルター・ミリスがいうように、陸上自衛官の戦史研究者は、「一般の歴史家の関心と技術を戦争研究に適用させる技術的に訓練された専門的な歴史学者」⁵⁶なのである。

55 戸部「『軍人歴史家』と『純粹歴史家』」6頁。

56 Spector, "Military History and the Academic World," p. 431.